



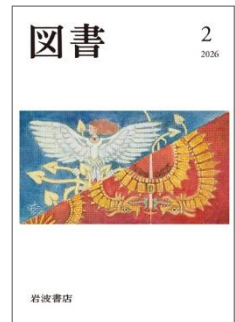
# ぶんこだより

子どもたちと、もっともっと絵本を楽しんでもらいたいから…

3 MAR  
2026

## 「小澤 俊夫」

岩波書店の「図書、2026年2月号」（書物や読書をめぐるエッセイ誌）の、冒頭「読む人、書く人、作る人」は、口承文芸者、小澤俊夫の「昔話を聞かせてやってください」です。「…身近な大人が生の声で聞かせてくれるとき、その声は子どものなかに一生の宝物となって残るでしょう」とあります。「聞かせてやるとき」の要点としても「…子どもたちに昔話を読んで、あるいは語って聞かせてやってください。そのとき『この話にはこういう意味がある』などといわないでください」とあります。そして、「…物語のできごとを作り変えてしまったもの、表現を昔話とは縁遠い美しい創作文芸の表現に変えてしまったものもあります。私は昔話を本来の簡潔で明瞭な文体で次の世代に渡したいと思っています」ともあります。昔話を聞かせるのを、「ただ楽しく」「身近な大人が生の声で」ということで「昔話を聞かせる」ことの基本は言い尽せているのは、そのまま絵本を読み書かせることと、ほぼつながっています。



そんな昔話 301 話を、全五巻でまとめたのが、小澤俊夫の「日本の昔話 全5巻セット」（著：小澤俊夫、画：赤羽末吉／福音館書店、1995年）です。その各巻の「あとがき」は、「日本の昔話」301話の構成について、主として「方言」で、それぞれの地域で、「語り」「聞かれ」「伝えられてきた」昔話の姿、それを現代の社会で伝え

ることの意味などが、簡易に、しかし適切に「解説」されています。

それは、「解説」に止まらず、昔話を現代の社会で、子どもたちが耳にすることが、いかに大切かも言及されています。

「…現在の日本には、本はいくらでもあるし、あらゆる娯楽がひしめいています。しかし昔話には、自然と密着してきた日本人の自然観がしみこんでいるし、子どもが育つとはどういうことかという子ども観、人生観がしみこんでいます。そして、生命はどうやって成り立っているかなど、人生の基本的なことについての知恵が、幾世代にもわたってしみこんできたといっただいでしょう」とあって、それが結実したのが「日本の昔話」であること。「…そういう昔話が、本来の姿を保持したまま共通語となりました。これが、子どもたちの耳へととどくことを願っています。もちろん、目で読まれてもけっこうですが、その場合にも、できれば声に出して読んで、自分の耳に聞かせてやって下さい」。

この「耳に聞かせてやって欲しい」についても、短く言及しています。

「…人間の声は不思議な力を持っています。声の善し悪しのことではありません。声は耳から、直接心にはたらきかけるようです。近ごろでは、目からはいる文化があふれていますが、昔話は本来耳で聞かれてきた文化ですので、耳に通して楽しんでもらいたいと思います」。

この昔話は、ですから、自分の言葉にした大人が、子どもたちに語り聞かせるのが何よりですが、ゆったりした時間のゆったりした場所で、昔話のどれであれ、自分の目で読んで、自分の心に受けとめた昔話を、子どもたちの身近の人の言葉で語り聞かせることができれば、子どもたちととても幸せな時間を共有することになります。

もう一つは、これらのことを踏まえてできた昔話絵本を子どもたちが読み聞かせもしてもらおう時、読み手も子どもたちも、とても幸せを共有することになります。

そんな絵本が、小澤俊夫によって「再話」され、赤羽末吉の絵でできあがった、「**みるなのくら**」「**うまかたとやまんば**」「**かちかちやま**」だったりします。(いずれも発行は福音館書店です)

### 「かちかちやま」

(再話：おざわとしお、画：赤羽末吉／福音館書店、1988年)

いったい、今まで何回子どもたちと「かちかちやま」を楽しんできたことでしょうか。「楽しんで」というには、「かちかちやま」は「残酷」な昔話です。



「おかし、あるところに、じいさまと ばあさまが すんでいました」の「ばあさま」は たぬきにだまされて殺されてしまい、「ばあじる」になってしまいます。その「ばあじる」を、だまされ食べてしまった、じいさまの「嘆き、悲しみ」は並ではありません。

「たべおわったとたん、たぬきは とぐちのところへ かけていって、『ばあじる くったし、あわもちくった。ながしのしたのほねを みろ』と さげぶと、もとの たぬきのすがたになって、やまへにげていきました」

「じいさまは くやしくて くやしくて、おいおいなきだしました。」

一緒に住んでいた、ばあさまが、「ばあじる」になって、それを食べさせられてしまう、残酷な話しを、子どもたちに聞かせてしまうことになるのですが、それは語り手として、どんなに解説しても、解説のしようがありません。

しかし、昔話は、そんな事は一切なくて、昔話の物語としての事実と「淡々」と語ります。

そうして、語り（読み）終えた時、子どもたちは、たぶん特に質問もしないし、昔話の物語を共有した事が、心に残り、その読み手（語り手）のことも心の残るはずです。とつても、大切なことを共有した大人として。

これが、小澤俊夫のまとめた 301 話の昔話の力であり、子どもたちと読み手（語り手）への贈りものなのだと思います。

以下、上記の3冊とは別に、思いつく範囲での、大切な昔話をいくつかをあげてみます。

「ごろはちだいまょうじん」（作：中川正文、画：梶山俊夫／福音館書店、1969年）

「ねずみじょうど」（再話：瀬田貞二、画：丸木位里／福音館書店、1971年）

「こぶじいさま」（再話：松居直、画：赤羽末吉／福音館書店、1980年）

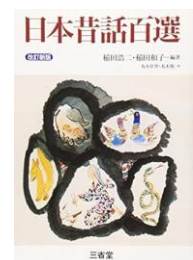
「ふるやのもり」（再話：瀬田貞二、画：田島征三／福音館書店、1969年）

「くわずによぼう」（再話：稲田和子、画：赤羽末吉／福音館書店、1980年）

「かさじぞう」（再話：瀬田貞二、画：赤羽末吉／福音館書店、1966年）

「だいくとおにろく」（再話：松居直、画：赤羽末吉／福音館書店、1967年）

尚、再話された日本の昔話としては、1971年の発行以来、今も「語り」「読み」つながれているのが「日本昔話百選 改訂新版」（編：稲田浩一、稲田和子、画：丸木位里・丸木俊／三省堂、2003年）です。北国から西国まで広く集めた昔話を、その言葉（方言）の特製を残しながら



「共通語に近づけた」ものですから、「生きのよい語り調」を楽しめる再話になっています。

ずっと「語り」「読み」つながってきた「日本昔話百選」、現在は改訂版となって発行されています。



## 絵本とともに

～絵本とともに、子どもと歩む日々～



2月の「まち食堂」では、「あかりの花 中国苗族民話」（再話：肖甘牛、君島久子、画：赤羽末吉／福音館書店、1985年）を読ませていただきました。以前、読み聞かせについての本を読んだ時「自分がいいと思ったお話を、心を込めて読みましょう。それがいい読み方です。」という言葉を目にしました。読み聞かせの技術はともかくとして、今回も、心を込めて読ませていただきました。読めば読むほど深みが増してくるこのお話、うなずきながら聞いて下さる方もいて、とても嬉しかったです。読み終えた後、お話に登場する娘が刺繍した布の絵を見ながらお話がはずんだのも、絵本からつながる嬉しい時間でした。いつもありがとうございます。

### 「みるなのくら」

（再話：おざわとしお、画：赤羽末吉／福音館書店、1989年）

「一のくらを あけると、なんと そこは、おしょうがつ。」



ページを開くと、「一のくら」の中の様子が見開きいっぱいに描かれています。羽子板で遊ぶ子どもたち、空高く揚がる凧、わら草履を履いた人、頭巾をかぶる人...雪景色の中、お正月を楽しんでいる人々の様子が印象的です。そして、「二のくら」を開けると、節分の豆まき。まだ雪が残る中を、豆を投げつけられた鬼たちが逃げていきます。豆を投げている子どもは、少し大きいお兄さん、鬼が来ても泣きません。力強く豆を投げつけています。

「三のくら」を開けると、桃の節句。何とも華やかな雛飾りの前で、桃色の着物を着

た子どもたちが遊んでいます。きれいな桃の花も生けてあります。

このように、「十一のくら」まで、その月々の行事や季節の様子が表されています。ページをめくるたびに、日本では、人々が昔から四季の行事を大切にしてきた様子と、自然と共に生きてきた様子を感じ取ることができます。「九のくら」は、大嵐でした。

また、「まるで、舞台のよう。」ページを開くたびにそう思いました。左右に描かれている蔵の黒い戸が、舞台のカーテンのようです。生命の歴史を5幕の劇に見立てた『せいめいのれきし』（文・絵：バージニア・リー・バートン、訳：いしいももこ/福音館書店）を彷彿とさせました。

「十二のくら」を開けると...我が子の出した答えは「クリスマス！」でしたが...残念、日本の昔話ではそうはいきませんね。絵本を開いて、お確かめいただければと思います。

### 「よりぬき日本の昔話 ももたろうほか」

(再話：小澤俊夫/福音館書店、2025年)



子どもにお話を読んであげることが大好きなお母さんたちにとって、お話（絵本）を選ぶ、ということは、楽しくもあり、時には悩んでしまうこともありますよね。出かけるときにバッグに入れてじゃまにならない大きさや重さ。また、いくつかのお話が収録されている。そして、あまり長くなくて気軽に読めるお話。こんなお話がつまった夢のような一冊が...あるのです！（少し前なら、『母の友』の「こどもに聞かせる一日一話」の特集号がそうでした。）今回見つけたのが、この『よりぬき日本の昔話』です。おざわとしおが再話した『日本の昔話』から、さらによりすぐりの12話が収録されています。よりすぐり、というだけあって「桃太郎」「舌切りすずめ」「笠地蔵」「かちかち山」...と、お馴染みのラインナップ。その中で「頭の大きな男の話」には初めて出会いました。びっくり仰天のおもしろいお話でしたよ。春休み、ぜひ親子で楽しんでくださいね。

# 今月のつくって!あそぼう!

## タンポポを摘もう

タンポポを食べるなんて、驚き?  
日本では江戸時代にも食べていて、  
ヨーロッパでは野菜として親しまれています。

花…花自体に甘みはないが、  
煮出したエキスはほんのり甘  
く、あと味にかすかに苦みを感じ  
る。

葉…成長した葉は苦みが強  
く、かたい。生で食べるな  
ら、花芽がつく前のやわらか  
い新葉を摘む。



## たんぽぽクッキー

黄色い花びらを練り込んだ  
バターたっぷりサクサクのクッキー

### 【材料】 15～18 枚分

- 無塩バター 100g
- 砂糖 45g
- 塩 小さじ 1/3
- 薄力粉 150g
- タンポポの花びら 10～20 個分
- ローズマリー (ドライ、または生葉のみじん切り) 大きじ 1/2

「うたかたま 2021 vol. 62」  
(農村漁村文化協会) より

## 【作り方】

- ① バターを泡だて器でクリーム状になるまで練る。  
砂糖、塩を加えて混ぜ、なめらかになったら「花びら」、ローズマリーを入れて全体になじむまで混ぜる。
- ② 薄力粉をふるい入れ、切るように混ぜる。  
全体がそばろ状になり、粉っぽさがなくなったら、生地をひとまとまりにする。
- ③ ポリ袋に②の生地を入れ、手で平らに整えたら、冷蔵庫で 30 分休ませる。
- ④ 冷蔵庫から出した生地を 5mm ほどの厚さにのばし、型抜きする。
- ⑤ 型抜きした生地をオーブンシートを敷いた天板に並べ、170℃に予熱したオーブンで 20 分焼く。  
\*生地をのばすときは、ポリ袋に入れたまま、またはオーブンシートにはさむと、生地がくっつかず、のばしやすい。



# 今月のわらべうた

♪ 清水の観音さま (栃木の手毬唄)



「おはなしのろうそく16」(東京子ども図書館編)より



## ♪つくしはつんつん

つくしは つんつん できるんだ  
わらびは わらって できるんだ  
きのこは きのにしたに できるんだ  
しょうろは しょうろっと できるんだ

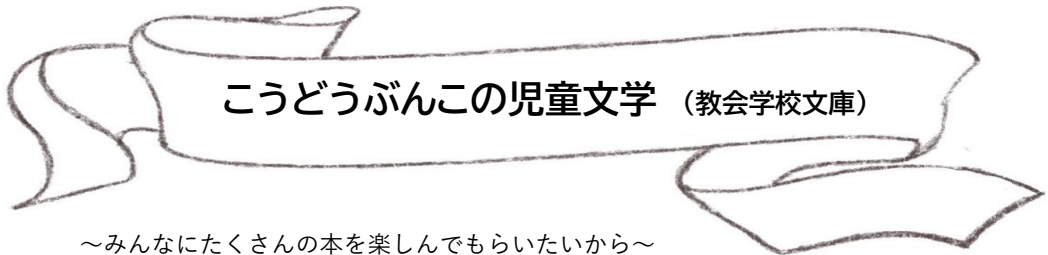


## ♪おてぶしてぶし

おてぶしてぶし てぶしのなかに  
へびのなまやけ かえるのさしみ  
いっちょばこやるから まるめておくれ いーや

### 手合わせ歌

手の中に隠した10円玉などを順々に回して、誰がもっているかあてます。  
1人がキャンディなど、小さなものを1つ、両手を合わせた中に入れ、上下に振って歌います。  
「どっちの手にあーるかな？」と言って、みんなに当ててもらいます。



皆さんはどんな時に絵本を読みますか？

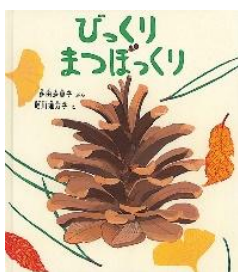
我が家はすっかり子どもたちが大きくなり、一緒に絵本を読む機会がほとんどなくなってしまいました。そんな中、最近学校へ行きたくない三女。日々浮かぬ表情。一緒に過ごしてあげたいのですが、仕事があるため、その願いもなかなか叶わず。少しでも心の通う時間を、との思いから、就寝前に「絵本読む？」と声をかけると、フットワーク軽く本棚へ向かう三女。2冊を手に戻った彼女に、なぜこの絵本を選んだのか尋ねてみると、「好きな絵本は何回も読んでもらった記憶があって、その中から、少

し内容を思い出したいなって思った絵本を選んだ。」とのこと。成長した三女の隣で、幼い頃の読み聞かせの時間を思い出し、絵本によって紡がれ深まり、安定する親子の関係に、「絵本」との出会いに改めて感謝する瞬間でした。「絵本」って幸せな子育てそのものだなんて、そう感じられるのも今までの出会いがあってこそ。すべてに感謝。さて、学校苦手な三女の行方はいかに。(笑)

今回は、その2冊を少しご紹介させていただきます。

### 「びっくりまつぼっくり」

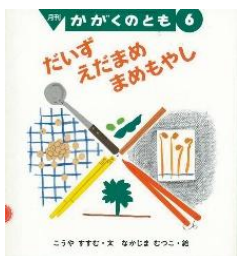
(文：多田多恵子、画：堀川理万子／福音館書店、2006年)



まつぼっくりの不思議な生態が、身近な生活を通して楽しく描かれています。まつぼっくりって、雨に塗れるとキュッと閉じて、晴れて乾くとパッと開くんですね！この大変身のことは、この絵本を通して知りました。また、普段あまり見ることのない「種」についてもわかりやすく紹介されています。最後にびっくりマジックも！！このマジック、試した方も多いのではないでしょうか？？我が家も鮭フレークの空き瓶を利用して実験しましたよ。「わぁ！絵本と同じ～」と親子で感動したのを覚えています。短な文章でとても読みやすいですよ！！

### 「だいた えだまめ まめもやし」

(文：こうやすすむ、画：なかじまむつこ／福音館書店、1992年)



我が子3人とも大好きで、何度読んだかわからない一冊です。同じ豆から、大豆、豆もやし、枝豆、そして大豆に戻る過程を、3人キョウダイのお話仕立てで描いています。大豆の変化の楽しみはもちろん、豆もやしはラーメンに、枝豆は茹でて、大豆は煮豆にして、みんな食べてしまう場面がなんとも美味しそうなんです！是非一読を。

# こうどうぶんこ によろこ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」（著：石井桃子／岩波書店、1965 年）に促されるように、教会礼拝堂の隅っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始めました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなのです。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」によろこ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。



## 1、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

## 2、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、などなど、言葉であそぶ時間です。

## 3、1 度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

## 4、貸出期間

2 週間

## 5、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

## 6、お問合せ

〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

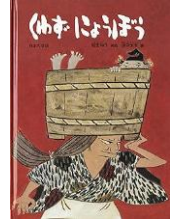
西宮公同幼稚園内 こうどうぶんこ

TEL : 0798-67-4691

FAX : 0798-63-4044

MAIL : koudou@gamma.ocn.ne.jp





# こうどうぶんこ

日時：毎週水曜日 15時～16時45分

場所：ぶんこの部屋（西宮公会教会付属 西宮公会幼稚園）

April 4 2026

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29 <small>昭和の日</small>	30		

May 5 2026

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3 <small>異国記の日</small>	4 <small>みどりの日</small>	5 <small>こどもの日</small>	6 <small>若葉の日</small>	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

## 編集後記

私たちが編集・発行しています。ご意見や感想、お聞きに  
なりたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濱・田場・金澤